
ウェディングの奇跡

モロッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウエディングの奇跡

【Nコード】

N03570

【作者名】

モロッコ

【あらすじ】

今回もオオカミさんシリーズで行きます。

今回はイベントすっ飛ばして、結婚式ネタで行きますよー
涼子×亮士です。

（前書き）

駄文ですが、よろしくお願いします。

俺は今日、背負うものが一人から二人になる。

「緊張するなあ……」

そう、俺は今日を持って一つの家庭を築いていくんだ。
それはもちろん、一人じゃない。

「涼子と一緒に屋根の下で暮らすのか……」

正直、実感がわかない。

涼子と二人で同じ屋根の下で暮らしていくこと、夫婦として過ごしていくこと。

これから起こる、すべてのことから涼子を守るか、全部が不安でいっぱいだった。

俺からプロポーズしといて、何言ってるんだろうな。

『こんな俺ツスけど、涼子さんとずっと一緒にいたいんす。』

今思い出しても、笑えてくるよな。

あの数年前の、御伽学園卒業式の出来事だった。

俺は、今までの思いを全部涼子に伝えた。

君のことを、どう思っているのか。

君を、誰よりも愛していることとか。

たくさん、数えきれないほど伝えた。
途中、涼子の顔がリングみたいに真っ赤になっていたのは、今でも
印象に残っている。

そして、最後に言ったあの言葉――

『亮士がいいなら、私は大丈夫……』

「亮士？」

「あ、はいッス！」

思い出にふけっていると、突然涼子に声をかけられた。
後ろからだったため、驚いて昔のヘタレ口調に戻ってしまった。

「あっ……」

そして、涼子を見て圧巻してしまった。

浦島さんみたい、と思ってしまっても構わない。本当のはなしだから。

――美しすぎる――

もう、それ以外の言葉が見つからない。

真っ白なウエディングドレスに身を包んだ涼子は、恥ずかしいのか、少し頬を赤らめていた。

白いウエディングドレスと涼子の顔の赤さの対象が、また美しかった。

「お、俺には似合わないかな…」

俺の反応に少し不安を覚えたのか、涼子は少し俯いてしまった。しまった、この反応はまずかったか。

そう思った俺は、すぐさま涼子に近づき、耳元で囁いた。

「その格好があまりにもかわいいから、思わず見とれてたよ——」

「っ！／／／」

くすぐったさか、恥ずかしさは分からないけど、涼子は俺からすぐ離れて顔を真っ赤にした。

「ず、ずるいぞっ！／／／」

「涼子の可愛さがずるいって。」

「そ、そんなこと言ったら亮士のそのタキシード姿だって…／／／」

「そ、そうか…／／／」

しばらくの沈黙。

だけど、その沈黙にはなぜか温かさがあった。

「…お二人とも？」

「あ、はいっ！！」

「な、なんだよりんごー！！」

その沈黙の中を、さも気まずいように、しかし見計らったように赤井さんが顔を出した。

「そろそろって牧師さんが言っていましたのよ？」

「あ、ああ。分かった。」

「今行きますッス！」

「分かりましたの。
それと森野君…」

「大丈夫ッス。」

涼子さんは、俺が命をかけて一生守り抜くッス。」

赤井さんの言いたいことは大体分かっていた。

この結婚式が行われるだいぶ前から、赤井さんには耳に穴があくほど「涼子ちゃんを頼みましたの」と言われ続けていたのだから。

「分かったならいいんですの。」

ほら、早く来ないと脇役さん達が主役さんをお待ちかねですよ？」

赤井さんはそういうと、ドアをそっと閉めた。

「…行くか。」

「そうだな。」

につこりとほほ笑んで、俺達は式場に向かう。

涼子の手をしっかりと握って、涼子にしっかりと握られて。

この温かい手が、これからはずっと一緒なんだと思うと嬉しくてたまらない。

「では準備も整ったようなので…

新郎、新婦のご登場です——」

牧師の合図とともに、俺達は地面を一步一步踏みしめる。

ここまでくるにあたって、たくさんのことを思い返しながら式が終わった。

大事なシーン？ああ、あのときか…

「それでは誓いのキスを——」

「それじゃあ…って／＼／」

一緒にやる前に、俺が涼子の唇を奪ったなあ。

それで涼子に恥ずかしいだらって言われて頭を叩かれてた。

俺達の出会いは多分、運命的に決められていた。

視線恐怖症の俺、男性恐怖症の涼子。

ちぐはぐの二人がこうして結ばれることも、多分神様が決めた、運命なんだと思う。

この奇跡の運命に、俺は心の底から感謝し、絶対に離すまいかとまた決意を新たにした。

涼子、これからもずっと、俺の隣で笑っていてくれよな――

（後書き）

どうでしたか？

何かあれば感想等、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0357o/>

ウエディングの奇跡

2010年10月11日03時00分発行